

**<特集論文>長門本『平家物語』灌頂巻の考察：「女院吉田入御」「女院出家」記事を中心に**

著者	嘉成 薫
雑誌名	日本文學誌要
巻	57
ページ	32-41
発行年	1998-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019990">http://hdl.handle.net/10114/00019990</a>

# 長門本『平家物語』灌頂卷の考察

「女院吉田入御」「女院出家」記事を中心に

嘉 成 薫

## 一、はじめに

『平家物語』灌頂卷に関する研究は、『平家物語』<sup>1</sup>において始められたと言つてよいかと思う。以後膨大な数の論文が発表され、<sup>2</sup>『平家物語』の研究が本格的に始まって以来、常に研究者の関心を引くテーマであり続けていると言つても過言ではないようにさえ思われる。灌頂卷に関わる問題点としては、①灌頂卷特立の時期、灌頂卷は『原平家』当初からあったのか、後に特立されたのか、②灌頂卷の「灌頂」とは結縁灌頂の意なのか伝法灌頂の意なのか、③『往生要集』『六道講式』『宝物集』『出家授戒作法』

『閑居友』等との典拠関係・影響関係の問題、④法華経提婆品に見える龍女成仏との関係の問題、⑤建礼門院や他の登場人物の人物像等の問題、等々、ざつと挙げただけでも実に多彩である。そして、これらの問題点がいまだ研究者の関心の対象となっているということは、その殆どが解明されていない、ということに他なるまい。そこで本稿においても灌頂卷を取り上げ、問題の一端なりとも解明すべく考えていくこととしたい。とは言え、問題とすべき事柄はあまりに多く、且つ又、一つ一つの問題はあまりに大きい。紙面の都合もあり、今回は長門本の「女院吉田入御」「女院出家」に含まれる記事を対象としていくこととする。この二つの記事は長門本において

は灌頂卷の他、卷十八にも記されており、長門本灌頂卷の成立に関して何らかの鍵になると考えるからである。

具体的な作業としては、長門本の卷十八及び灌頂卷のそれぞれの記事の対照、諸本との異同の確認を通じて問題点を探っていききたい。対照する本文には延慶本・四部合戦状本・源平盛衰記・屋代本・覚一本を用いることとする。<sup>3</sup>

## 二、卷十八の女院関係記事について

卷十八の女院関係記事を他の諸本と比較すると、長門本の方には独自記事が見られないことに気づく。また、長門本にあって延慶本に欠けている記事は見当たらず、逆に四部本にあって長門本に欠けている記事も無い。<sup>4</sup>つまり四部本の記事は長門本に全て含まれており、そして長門本の記事は延慶本に全て含まれているのである。盛衰記も卷四十四と卷四十八（灌頂卷に相当）のそれぞれに「女院吉田入御」「女院出家」の二章段を持つが、盛衰記卷四十四は出家の戒師である印西に関する独自異文を持ち、「君王の傍らに候給て、あしたには朝政をすゝめ奉り、夜

は夜を専らにし給ふ」の一文を欠く。同じく卷四十八の方は冒頭に女院が吉田に入御するに至るいきさを簡略に述べる独自記事を持つが、「同追善といひなからはくたいの御せんこんなり」の一文を欠いている。語り本では「花は色々にはへども、あるじとたのむ人もなく、月はよなくさし入れど、詠めてあかすぬしもなし（覚一本・屋代本で同文、覚一本で代表させた）」の一文を持つが（長門本も灌頂卷の該当箇所にはこの一文がある）、逆に欠いている文言も数カ所見られた。

さて、具体的な記述として注目しておきたいのは、以下の一文である。

たとへ蒼海のそこにしつみおはします共、このくとかくによて、修羅道のくけんをまぬかれおはしまし、安養の浄刹に御往生うたかひあらしとたのもしくそおほしめさる。

（傍点筆者）

この一文は四部本・屋代本・覚一本には見えず、延慶本・盛衰記には記されている。延慶本は長門本と同文であるので略すが、盛衰記は卷四十四・卷四十八それぞれに若干異なるので以下に掲げておく。

縦沈<sup>ニ</sup>蒼海<sup>ノ</sup>之底<sup>ニ</sup>、雖<sup>レ</sup>受<sup>ニ</sup>修羅<sup>ノ</sup>之苦<sup>ニ</sup>患<sup>ニ</sup>、豈生<sup>ニ</sup>白連<sup>ノ</sup>之上<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>誇<sup>ニ</sup>菩提<sup>ノ</sup>之快樂<sup>ニ</sup>ヤト憑<sup>ク</sup>ソ覺<sup>ケル</sup>。

(卷四十四)

縦<sup>ニ</sup>修羅<sup>ノ</sup>闘戰<sup>ノ</sup>、咎<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>、蒼海底<sup>ニ</sup>沈<sup>給</sup>共<sup>ニ</sup>、ナトカ常行莊嚴ノ善ニ答テ、青蓮ノ上ニ生<sup>レ</sup>給ハサラント、憑<sup>シク</sup>コソ覺<sup>エケレ</sup>。

(卷四十八)

(傍点筆者)

言うまでもなく「蒼海のそこ」に沈んでいるとは、安徳帝を指す。とすると、「修羅道のくけんをまぬかれおはしまして」とあるのは、いささか問題である。と言うのも、「六道」の記事の中に、

ある夜の夢にゆいしけなる御所に、先帝二位殿を始として、宗盛以下の公卿殿上人なみ居たり。これはいつくそと尋ねれば、龍宮城とこたふ。此所にくるしみはなきかと問へば、争かくるしみはなかるべきと答て夢覚ぬ。夢うつゝ異なりといへとも、是則畜生道なり。

(傍点筆者)

とあつて、安徳帝は畜生道に落ちていることになつ

ているからである。延慶本の場合、畜生道に当てているのは女院と宗盛との不義の噂のことである。龍宮の夢については「海ニ入ヌル者ハ必ズ龍王ノ眷属トナル(傍点筆者)」としている。盛衰記の場合、同じく女院の不義の噂を畜生道に当て、龍宮の夢については、

或夜聊マトロミ入テ候シ夢ニ、昔ノ大内ニハ超過シテ、ユ、シキ所ニ罷テ候シカハ、先帝ヲ始進セテ、一門ノ卿相雲客、目出ク礼儀シテ候シカハ、都ヲ出テ後ハ、懸所ハ未<sup>レ</sup>見、是ハイツコソト尋候シニ、新中納言知盛ト覚キ人、是ハ龍宮城ト答シカハ、難<sup>レ</sup>有カリケル所カナ、此ニハ苦ハナキカト問候シニ、争カ苦ナクテ候ヘキ、龍軸経ノ中ニ説レテ候、ヨクく御覧シテ、後生吊マシマセト申ト思テ覚候、穴無慙ヤサテハ此人々、龍宮城ニ生ニケリ、後世ヲ被<sup>レ</sup>吊テ、角夢ニ見エケルニコソト思テ、(中略)今ハ此人々、龍畜ノ依身ヲ改テ、浄土菩提ニ至ヌラントコソ覚テ候ヘ、

(傍点筆者)

となつており、ここでは安徳帝始め一門の人々は

「龍畜ノ依身」を持つていることになっている。延慶本・盛衰記の「竜王ノ眷属」「龍畜ノ依身」もやはり、安徳帝の畜生道に堕ちたことを示している。念のため、灌頂巻の六道思想に影響を与えているとされる『往生要集』の畜生道に関する記述を確認しておこう。

第三に、畜生道を明さば、その住处に二あり。根本は大海に住し、支末は人・天に雜はる。(中略) またもろもろの竜の衆は、三熱の苦を受けて昼夜に休むことなし。<sup>5</sup>

(大文第一、傍点筆者)

これによれば、「龍王ノ眷属」や「龍畜」は畜生道の衆生であつて、その住所は「大海」である。長門本だけではなく延慶本・盛衰記でも安徳帝は畜生道の衆生になっていることになる。ではなぜ安徳帝が「修羅道のくけん」を受けていると解釈されるのであろうか。

ここで改めて長門本の構成を思い出したい。長門本は巻十八に「女院吉田入御事」として女院の出家記事も載せている。しかし、同じ趣旨の記事が灌頂

巻冒頭にもあつて、記事の重複を見せている。このことと、問題の一文の意味を考え併せると、灌頂巻成立について一つの重要なことが浮かび上がってくる。すなわち「六道」の記事は最初からあつたわけではなかったのではないか、ということである。もう少し言えば、「六道」の無い灌頂巻というのも考えにくいから、灌頂巻そのものが当初は無かつたのではなからうか。<sup>6</sup> 今仮に長門本から灌頂巻全体を削除すると、修羅道と畜生道の矛盾も解消され、記事の重複自体も生じないことになる。この他にも長門本は本巻部分と灌頂巻とで矛盾している点が見られるが、それらが全て解消されることとなる。

盛衰記の記事を見るとこの思いはさらに強くなる。盛衰記巻四十四では「雖受修羅之苦患」となつており、「六道」との矛盾は長門本と同様であるが、巻四十八の記事を見ると「縦修羅闘戦ノ咎ニ依テ、蒼海底ニ沈給共」となつており、「修羅道に堕ちた」とはしていない。苦しいながらも「六道」との整合性を保とうとしていることがわかる。盛衰記のこの操作は灌頂巻特立の際に行われたもので、長門本は灌頂巻特立の際に問題の一文を削除したのであろう。

### 三、灌頂卷「女院吉田入御」「女院出家」記事に関して

灌頂卷の「女院吉田入御」「女院出家」記事を諸本と比較すると、長門本の方に独自異文が多く見られることに気づかされる。そしてこれら独自異文は卷十八の重複記事中に欠けている文言とほぼ一致する。さらに叙述の順序が入れ替わっている部分が一箇所有る。諸本では「五月一日御くしおろさせ給ふ」に相当する一文の後、御戒師に印西上人が参つたこと、布施として安德帝の御衣を差し出したことが続き、その後に

御年廿九にそならせ給ふ。芙蓉の御すかたは、つきせぬ御物おもひにおとろへ、塩風にやせくろませ給て、その物ともあらずならせ給へとも、かゝるうき世には、猶人にはいかてかまかはせ給ふへき。しかれともひすいのかむさし御身に付けても、かゝるうき世には、いまはなにかはせんなれば、翠黛紅顔もよしなくおほしめしつゝ、御様をかへさせ給ふ。

(傍線筆者、長門本灌頂卷の独自記事を示す)

に相当する記述があるのだが、長門本灌頂卷では「五月一日御くしおろさせ給ふ」の直後に「御年廿九にそならせ給ふ」以下の文が続き、その後に御戒師に印西上人が参つたこと、布施として安德帝の御衣を差し出したことが記される。長門本も卷十八の該当部分では諸本と同じ構成を採っており、長門本灌頂卷のこの構成は、独自なものとなっている。

ところが、長門本灌頂卷はこの部分の構成を独自な形としたために、その後の文との繋がりが悪くなつてしまつてゐる。問題の箇所の最後は「且はかの御菩提の御為にやと、よそのたももしほるはかりなり」となっており、布施として差し出された安德帝の御衣のことが話題となつてゐる。にも関わらず、その直後には「五月の短夜もあかしかねさせ給つゝ、おのつから打まとろませ給ふこともなければ」とあつて、唐突に女院の心情の描写となり、文脈が途切れてしまつてゐる。このような文章構成をオリジナルのものとして書くということは、普通考えられぬ事である。とすると、何のためにこのような文章の構成にしたのか、その目的については不明だが、長門本のこの部分は、卷十八の該当箇所のような構成を持つ文章を編集した上で独自記事を追加したも

の、と見ておくのが妥当であると思われる。

次に、長門本灌頂巻の出家記事からもう一点、問題となる部分を見ておこうと思う。

御戒師には、長樂寺の印西上人まいらせ給けり。  
御布施は先帝の御直垂をなくく取いたさせ給ふ。上人かねうちならして、

流転三界中、恩愛不能断、奇恩入無為、真  
実報恩者

御願旨趣者、併三宝知見をはしますらむとはかり申させ給て、墨染の衣の袖をそしほられける。

「上人かねうちならして」以下の部分は諸本には見られない独自記事である。長門本巻十八では「上人これ（筆者注、安德帝の御衣）を給て、何といふ事をは申ささりけれ共、涙をなかしすみ染の袖しほる計也（傍点筆者）」となっており、内容が異なっているだけではなく、全く逆の意味となってしまう。長門本にはこのような矛盾が他にも見受けられる。巻十八では「芙蓉の御かほはせはいまたおとろへさせ給はね共（傍点筆者）」としているのが、灌頂巻では先に引いたように、「芙蓉の御すかたは、つ

きせぬ御物おもひにおとろへ、塩風にやせくろませ給て、その物ともあらずならせ給へとも（傍点筆者、以下略）」などとなってしまうのがそれである。

それはさておき、先程問題の記事を独自記事と言ったが、「流転三界中」以下の偈は延慶本で別の箇所には引用されている。第六末廿五「法皇小原へ御幸成ル事」の中で、女院が六道のことを語り終えた後に、安德帝入水の場面を述懐している。その述懐の中で、安德帝入水の際に「流転三界中、恩愛不能断、奇恩入無為、真実報恩者、南無西方極樂教主阿弥陀仏ト十念高声ニ唱給」たとされている。

延慶本の女院出家の場面では、長門本巻十八と同様に、印西は何も言わなかったことになっており、ここにこの偈を引くことはできなくなっている。逆に長門本の場合、安德帝入水の件りでは、「先帝あきれさせ給て、是はいつくへゆかむするそと仰られ候しかは、夷兵とも御船に矢をまいらせ候へ共、御船ことに行幸なしまいらせ候と申もはてねは、波の底へいり候き」とあって、ここに問題の偈を引くことはできないようになっている。

長門本の引用箇所も延慶本の引用箇所も、共に安

徳帝に関わる記事の中に引かれていることがわかる。長門本では安德帝の菩提を祈る偈となっており、延慶本の場合安德帝の極楽往生を願う偈となっている。このことから考えると、「流転三界中」の偈は、（少なくとも物語の論理の上では）安德帝の救済ということと密接に関わる偈であると言えるかもしれない。

因みに、壇ノ浦合戦記事中の安德帝入水の場面と、女院の述懐の中の安德帝入水の件りとを見比べてみると、左のようになっている。

#### 延慶本

##### 壇ノ浦合戦

アキレタル御気色ニテ、「此ハイヅチへ行ム  
ズルゾ」ト仰有ケレバ、「君ハ知食サズヤ、  
穢土ハ心憂所ニテ、夷共ガ御船ヘ矢ヲ進ラ  
セ候トキニ、極楽トテ、ヨニ目出キ所ヘ具  
シ進セ候ゾヨ」トテ、王城ノ方ヲ伏拝給テ  
(略)最後ノ十念唱ツ、波ノ底ヘゾ被入ケ  
ル。

##### 女院述懐

「イツクへ行ベキゾ」ト先帝被仰シカバ、

「浄土へ具シ進ベシ」トテ、先伊勢大神宮ノ  
方ヲ伏拝奉テ、西ニ向テ、「流転三界中、恩  
愛不能断、奇恩入無為、真実報恩者、南無  
西方極楽教主阿弥陀仏」ト、十念高声ニ唱  
給テ、「設我得仏、十方衆生、(略)必ズ引  
摂ヲ垂給へ」ト唱モアヘ給ハズ、海ニ飛入  
リ給シ(以下略)

#### 長門本

##### 壇ノ浦合戦

せんてい、これはいつくへそとおほせあり  
ければ、弥陀の浄土へそ我君とて、波のし  
たにしつみ給ふとて、

いまそしるみもすそ川の御なかなみ  
のしたにもみやこありとは

##### 女院述懐

先帝あきれさせ給て、是はいつくへゆかむ  
するそと仰られ候しかは、夷兵とも御船に  
矢をまいらせ候へ共、御船ことに行幸なし  
まいらせ候と申もはてねは、浪の底へいり  
候き。

#### 盛衰記

##### 壇ノ浦合戦



コハイトコへ行ヘキソト被仰ケルコソ悲ケレ、二位殿ハ兵共カ御舟ニ矢ヲ進候ヘハ、別ノ御船へ行幸ナシ進セ候トテ

今ソシル御裳濯河ノ流ニハ浪ノ下ニモ都アリトハ

ト宣モハテス海ニ入給ケレハ、(以下略)

#### 女院述懐

先帝アキレサセ給テ、是ハ何へ行スルソト被仰候シニ、兵共カ御舟ニ箭ヲ進セ候ヘハコト、御船へ行幸ナシ進セ候也ト申ヤ遅キ、波ノ底ヘ入候ニキ。

(諸本共、傍線・傍点筆者)

このように並べてみると延慶本・盛衰記は両記事で矛盾はないが、長門本では二位殿の言葉が異なっていることがわかる。壇ノ浦合戦では「弥陀の浄土へ」行くと書いていたのが、女院述懐の中では別の船に移ると言ったことになってしまっている。長門本は女院述懐記事を書く際には、壇ノ浦合戦の記事を考慮に入れていないことになる。では長門本は何を見て女院述懐記事を書いたのであろうか。

ここで話を「流転三界中」の偈に戻す。実はこの

偈は源信の『出家授戒作法』の中に引かれている。となると、長門本は女院述懐記事を書くに当たって、『出家授戒作法』の引用であることから、この偈を女院出家の記事へと移動させたのではないか、という推測が成り立つ。その為に延慶本の該当部分のような記事を採用できなくなり、盛衰記と同文の記事に変更したのであろう。延慶本の壇ノ浦合戦記事にも傍点を付した部分のような句もあり、これに着想を得て長門本が書き換えたということも考えられなくもないが、延慶本傍点部は後から取って付けたかのようにも見えることから、むしろ延慶本傍点部は、盛衰記や長門本のような記事を見て、後に挿入されたのではなからうか。

さらに想像を膨らませれば、長門本での「流転三界中」の偈の移動は、安德帝の墮畜生道とも関わりがあるのではなからうか。延慶本では安德帝自身がこの偈を唱えたことになっているが、それにも関わらず、安德帝は往生を遂げることはできずに畜生道に堕ちてしまっている。長門本では安德帝は何も言わずに入水したことになっており、当然、往生の機会はない。したがって、畜生道に堕ちてしまっている。そして、夢に安德帝の墮畜生道を見た女院が帰洛の

後、出家する際に、印西がこの偈を唱えることによつて（そして安德帝の御衣を布施とすることによつて）、女院自身の、ひいては安德帝始め一門の人々の往生極樂が期待される（卷十八では「御往生うたかひあらし」と確約されるが、灌頂巻では往生の確約が明言されている訳ではない）、という物語の論理が働いているのではなからうか。

#### 四、むすびにかえて

以上、長門本卷十八及び灌頂巻それぞれの女院吉田入御・女院出家の二つの記事について、若干の分析を試みた。卷十八の記事の分析からは、灌頂巻が『原平家』には特立されていなかったこと、女院関係記事としても当初は「六道」の記事が存在しなかったであろうことなどを述べた。一方、灌頂巻の記事の分析からは、長門本灌頂巻の出家記事は、卷十八の該当箇所のような構成の文章を編集した上で、独自記事を追加したらしい痕跡があること、「流転三界中」の偈は、安德帝の墮畜生道ということと関わつて、その引用の位置を、延慶本のような位置から女院出家の中へと移動させたのではないかということ

等を述べた。

さて、今後に残された課題であるが、本稿で述べたことにしても、さらに検証を深めていく必要がある。冒頭にも述べたように問題は山積している。さし当たっては、本稿でも若干ふれたことだが、「六道」の問題について考えてみたいと思っている。長門本「六道」は他本に比べ、独自の記事・構成を見せている。また、『閑居友』『六道講式』等との影響関係・典拠関係の問題、龍女成仏や龍宮の夢の問題、建礼門院の妙音菩薩化身説の問題等々、関心を寄せるべき問題は多数ある。さらに本稿で考えた、「六道」と「女院吉田入御」「女院出家」との成立時期の違いの問題についても、今度は「六道」の記事の側から考えてみる必要もあるだろう。

はなはだ不十分な論考ではあるが、遠く「灌頂巻はどのように成立したか」「灌頂巻の述べようとするところとは何か」ひいては「長門本の成立」という目標へ向けての、私にとっての最初の一步として本稿を書いた。多くの御指導・御叱責を頂ければ幸いである。

主なものをいくつか掲げておく

橋本進吉氏 「平家物語灌頂巻と奥義抄灌頂巻」(『国語と国文学』一九二五年一〇月)

佐々木八郎氏 「平家物語灌頂巻私考——成立に関する試論——」(『学苑』一九三九年四月)

富倉徳次郎氏 「平家物語成立考——平家物語の編年的記述性格について——」(『国語国文』一九三九年九月)

渥美かをる氏 「四部合戦状本平家物語灌頂巻「六道」の原拠考——宝物集との関係を中心に——」(『愛知県立大学文学部論集』一九六九年一二月)

麻原美子氏 「『閑居友』と『平家物語』——典拠説をめぐって——」(『日本女子大学紀要』一九六九年三月)

小林美和氏 「平家物語の建礼門院説話——延慶本の出家説話を中心に——」(『伝承文学研究』)

兵藤裕己氏 「『平家物語』における芸能神——建礼門院物語・試論——」(『解釈と鑑賞』一九八八年九月)

山本ひろ子氏 「成仏のラディカリズム——「法華経」龍女成仏の中世的展開——」(岩波講座『東洋思想』16)

名波弘彰氏 「建礼門院説話群における龍畜成仏と灌頂をめぐって」(『中世文学』一九九三年三月)

使用するテキストは以下の通り

長門本……<sup>岡山大学</sup>平家物語 二十巻(福武書店 一九七七年一月)

延慶本……延慶本平家物語 本文篇(勉誠社 一九九二年六月)

四部本……訓読四部合戦状本平家物語(有精堂 一九九五年三月)

盛衰記……源平盛衰記<sup>長</sup>古活字版(勉誠社 一九七八年八月)

屋代本……屋代本平家物語(桜楓社 一九七三年五月)

覚一本……新日本古典文学大系 平家物語(岩波書店 一九九三年一〇月)

四部本の記事は卷十一の該当箇所を比較の対象とした。灌頂巻の記事は冒頭に「女院吉田入御」を置き、「女院出家」の記事を持たずに「大原入」へと続く。灌頂巻の「女院吉田入御」は完全な異文であり、ここでの比較の対象としてはなじまないで除外した。参考までに全文を載せておく。

抑も建礼門院は、二位殿に連き奉りて海へ入らせたまへど

も、東夷取り揚げ奉りつゝ、御上洛有りければ、心憂かりし波の上、船の内の御住居も、今は有らぬ御事に成り了てしかば、都へ販り上らせたまひて後、東山の吉田の辺なる中納言律師慶恵と云ひける奈良法師の住み荒らしたる朽ち房に渡らせたまふ。

(以下、女院の大地震に遭われたことを記し、「大原入」へと続く)

本文は、日本思想大系『源信』(岩波書店 一九七〇年九月)を用いた。

佐々木八郎氏「灌頂巻成立私考——成立に関する試論——」(『学苑』一九三九年四月)の中で、長門本に言及して、女院関係記事は当初「吉田入御」「御出家」「吉田御住居」の三章段だけであつたものが、後に「小原入御」、次に「小原御幸」「御住生」と次第に増補され、その後灌頂巻が特立されたと述べられている。

小林美和氏「平家物語の建礼門院説話——延慶本の出家説話を中心に——」(『伝承文学研究』一九八〇年五月)は、延慶本の出家記事中に「彼ヲキ、是ヲミルニ、誰ニ讓テカ歎カザラム。何ツヲ期シテカ勤ザラント、深ク思召取テ、真実報恩ノ道ニ趣キ、解脱幢相ノ衣ヲ染御ス。実ニ善知識者、大因縁也。何事カコレニシカム」の一節について、『出家授戒作法』引用の「流転三界中」の偈に通ずる、とされている。

(かなり かおる・博士課程三年)